

校舎のすぐそばには日本海がある



須永一道先生。人間総合学科学科長、キャリアセンターのセンター長を務め、多忙な日々を送る。ビジネスマンとして国内を飛び回った経験もあり、実務経験が豊富。「須永ゼミ」のゼミ生は22名。人気ゼミの一つだ



「須永ゼミ」の様子。この日は雇用をテーマにディスカッションを展開。活発に意見を言い合う学生たち

られる力を習得するのか。キャリア形成に関連する科目をご紹介します。

検定を学ぶプロセスが何よりも大事

キャリア教育の手始めに行うのが、「キャリアデザイン入門」「キャリアサポート」「キャリアプランニング」の三つ。全て必修に準ずる科目で、1年生約200名が受講する。

「とりわけ重要になってくるのが、1年生の前期に実施する『キャリアデザイン入門』です。職業観を醸成することが大きな狙いで、さまざまな企業や組織の方に講演をお願いしていま

す。登壇する方は、現役ビジネスマンや各企業の採用担当者、就職幹旋会社の広報など。講演のテーマはそれぞれ異なりますが、実際に社会人の話を聞くことで、学生は働くことをイメージしやすくなります。企業という組織に慣れるのももう一つです」(須永先生)。

社会人として働く上で必要なビジネスマナーや常識の習得を目指すのが、「ビジネス実務演習」である。ビジネス能力検定2級・3級と、秘書検定2級・3級の取得を目指す。

「二つの検定は、本学で『ビジネス基礎資格』と位置付けているものです。どちらの検定も学習をすることで、ビジネスマナーはもちろん社会の常識を身に付けられる。特に秘書検定は知名度が高いですから、合格できれば就職活動でも有利です。ただ合格を一番の目的にはしていません。何よりも大事なものは、学習のプロセスだから。「こういふときは、こう対応する』『このやり方がスタンダード』と新しい知識をどんどん得ることができます。学生は若いですから吸収力がよいのです。短大の2年間を利用して多くのことを得てほしい」と話し、こう続ける。「学習へのモチベーションを維持させるためには、資格に挑戦させるのが効果的だと思います。本学ではさまざまな分野の資格を取得することが可能です。ファッション系、フード系、語学系、観光系など多岐にわたり、その数は29個に上ります」。

同学では、これらの資格や検定のほとんどを

授業で学ぶことができる。選択科目「ビジネス文書実務」もその一つ。この科目では、ビジネス文書検定2級と3級の取得を目指している。導入したのは数年前だが、これまで2級、3級合わせて数百名の合格者を出していて、合格率も高い。そうした実績が認められ、平成27年度は文部科学大臣賞を受賞した。

「この科目では、ビジネス文書検定の対策を行っています。毎年1年生の後期に受験。3級に挑戦する学生がほとんどですが、よりレベルの高い級を取得したいと2級に挑戦する学生もいます。ビジネス文書検定を学ぶことで、社会人に必要とされる文書に関する決まり、言葉遣い、漢字が確実に身に付きます。こうした授業がなければ、ビジネス文書を学ぶ機会はなかなかないと思います。学生のうちに企業という組織に慣れてもらうためにも、ビジネス文書検定の学習は有効だと思います」(須永先生)。

ビジネス文書の学習で芽生えた、社会人の意識

実際に、ビジネス文書検定に合格した学生に話を聞くことができた。人間総合学科人間総合コース2年生の三名は昨年12月の試験に挑戦。3級に合格したのは、千葉結衣さんと佐藤圭純さんだ。二人ともビジネス文書を学ぶのは初めてで、学習を始めた当初は戸惑ったようだ。「難しいと思ったのが、体裁のルールです。文

書番号や記、以上などといった言葉は、場所が

最新事情 38 新潟青陵大学短期大学部

(左から)千葉結衣さん、池田有希さん、佐藤圭純さん。
3人とも人間総合学科2年生で、須永ゼミの所属。
千葉さんと佐藤さんは、ビジネス文書検定3級に合格。
池田さんは2級に合格。三人とも華やかで、その場
を明るくする雰囲気がある



決められているため、それを覚えるのが大変だった」と千葉さんは振り返る。それを聞いて佐藤さんは隣でうなずいている。

「体裁のルールが、社内文書と社外文書で違うことも勉強になりました。当然ですが、冒頭のあいさつ文は季節ごとに変えなければなりませんし、本題に入る位置にも決まりがあります。覚えるのに苦労しましたし悩んだ」と佐藤さんは思い返す。

2級に合格した池田有希さんはどうか。

「商業高校だったので、ビジネス文書を学んだことがありました。そこで私は2級に挑戦。2級を勉強して分かったのは、設問をよく読まないとミスにつながるということ。何を問われているのか。どう答えれば正答になるのかに注意して解答した」と話し、こう続ける。「友達と連絡を取るときはもちろん、先生や就職活動でもメールを使うことが多いので、手紙を書くことがほとんどなのです。なのでビジネス文書をいきなり書けと言われたら、今の若い人は戸惑うと思います。頭語と結語の正しい組み合わせを覚えるのも大変でした。『拝啓に対応するのは？ 謹啓は？……』と悩むことも。ビジネス文書検定に挑戦しなければ、こうした言葉や文書の体裁を知識として習得することはできなかったと思います」。

ビジネス文書検定で身に付けたことは就職

後、必ず役立つと千葉さんも佐藤さんも感じている。千葉さんは「勉強していなければ、失礼な言い方をしていたかもしれません。他の授業でも言葉遣いは学びますが、この検定でも学べたことで確実に自分のものになった気がします」と学びの成果を語る。

佐藤さんは、「どのような職種でも使える知識ばかり。学習を始めた当初は難しく感じましたが、慣れてくると楽しくなってきました。3級は取っ付きやすいので、多くの学生さんに挑戦してもらいたいです」と笑顔で話してくれた。

学生は「合格」も重視している。「履歴書の資格取得欄は全部埋めた」と胸を張る三人は、頭でできばきとインタビューに答える三人は、頭の回転のよさ、感じのよさ、親しみやすさや人に与える。

「先ほど、学習のプロセスが何よりも大事と話しましたが、学生はしっかりと結果を出してくれています。学生はキャリア科目や資格、検定の学習を通して、入学時とは全く違った顔つきで卒業していきます。目配りができるようになり、気が利くようになる。人に意識が向くようになり、場の雰囲気を読んで発言したり、行動できるようになる。ここまで成長すれば、就職活動でもほとんどの学生は困りません。就職率はここ数年、97%前後を維持しています」と話す須永先生の表情は自信に満ちていた。

先ほど話を聞かせてくれた三人は須永ゼミの所属。須永先生の冗談に対して「意味が分か

りません(笑)」と返したり、「先生、それは違うと思います」とはつきり言う様子は実にほほ笑ましい。「私に限らず、教員と学生の距離が近いのは本学の大きな特長」と須永先生。

同校の学生は真面目過ぎず、かと言ってふざけてはいない。この絶妙なバランスも学生の魅力の一つ。企業もそうした人材を求めている。

「本校の学生たちは、どこにでもいそうな若者だと思いませんか。しかし、実際はそうではない。常識、教養、知識を人並みに持つていて、愛想・感じがよい学生はなかなかいません。組織の中に、そういう子が一人でもいれば、職場は華やぐし、雰囲気が明るくなる。長年、地元から求人を受けているのは、そうした人材を送り続けているから。『青陵の学生なら間違いない』。地域の信頼を裏切らないためにも、これからの教育に力を入れていきます」(須永先生)。

「キャリアサポート」で講演者の話を聞く学生たち。
「実社会で活躍する社会人の話が学生たちの就業意識を高める」と須永先生は話す

